廣島縣地方の方言

藤原與一

一

地方の國名が何等かの方言領域をよく示すことのあるのは、かなり著しい傾向であるが、何々縣方言なる概稱の仕方は、一般に不穩當なことが多い。廣島縣地方に就いても亦、廣島縣方言などと呼ぶことは、廣島縣地方の方言と言ふ程の常識的な稱呼としてなら兎も角、或る一定の方言團体を指示せしめようとする嚴密な稱呼としては適當でないのである。

その事は先づ安藝と備後とより成る本縣が、方言狀態の上でも凡そこの兩國に大體はつきりと二分される點のあることに於いて看取せられる。備後は概ね備中に通ずるものを多分に有する所である。それとかなり明瞭に境せられる安藝は防長や石州と共通の性質を呈することの多い所である。從つて今、廣島縣地方の方言を問題にするに當つては、本縣地區を一括して大局的に論じ得ないものが最初からあることを認めておかなければならない。

二

しかし通常廣島縣地方の方言と稱した場合には、多く廣島市などを中心にしての當地方方言が考へられてゐる。偶〻廣島市が中心として位する此の安藝の國は正に廣島縣の大なる部分でもある。さうして單に安藝が廣島縣地域の大きな部分を占めるが故に今廣島縣地方方言の主調として備後よりはこれをとりあげると言ふ事は、偶〻、次下に考へられることによつて明かな如く、正に合理的なことでもあつたのである。そこで改めて何が廣島縣地方の方言として特質的に定位せられるかを考へてみよう。

こゝに暫く方言分布の系統的な考察を必要とする。私の今日までの調査とその若干の整理によれば、關西地方に於ける方言分布の最も主要且つ著しい系統線（地帶を假に線と名附ける）は、南九州を支點として一方山陰地方に延びるもの、と他方四國南半より近畿南部にかけて延びるものとの宛かも松葉の葉先を擴げた形にも似た一聯の地帶である。その委細をこゝに述べることは省略するが、この一大環狀にも似た系

統線が、廣島縣地方の方言を考へる上に不可缺の前提となるものである。さうして今一つ考へなければならない事は、中國四國に於いて就中大きな言語路と目せられるのが、この山陽道であることである。かくて先づ山陽道の西端防長地方は、一方歴史的な或る方言系統線上の存在であると共に他方常に不斷に改新されるべき、活潑な言語交渉路上の要衝に當つてゐることが知られよう。九州に於いて特に北部九州に今日の如き南九州とは相距つた方言の變改狀態が觀られる事と、これに直面する山口縣下が方言史的に古脈に當ると同時に新らしい變化をも起してゐることゝは、全くその軌を一にする。これは九州への入口を扼する防長地方の當然の運命であつた。こゝに於いて同じく山陽道ではあつても、廣島縣下などゝ山口縣地方とは地方言語としての地位性質を異にする點のあることが先づ領解せられる。從つて前述の如く防長地方と通ずる所の多い廣島縣下安藝地方の方言も亦、防長地方の方言と全く同似ではないのみならず、かなり相違した異質をも有する樣になつてゐる。さうして山口縣地方については特に二重の性格が考へられたのではあるけれども、主としては九州南部に絲をひく一大系統線上に位すると言ふ性格の方が、一層よく防長を廣島縣下地方から分つてゐると言ひ得る。石見の國が一方藝州に通ずる所を多分に有しながらも尙常には同一視し難い所に、石見の山陰に位する所以は想見せられる。出雲地方ともなれば、世に明かに知られてゐる如く、廣島縣下とは隔絶してゐる。

山陰或は防長地方の、中國に於ける特殊的地位は、中國四國の範圍內に於ける方言分布の狀態からも歸納される所である。即ち私の分布圖によれば、そこに、總括的には、山陰地方より山口縣下を經て四國の伊豫南部、續いて土佐に亘る所の一環の分布圈を見出す事が出來るのである。これは先述の南九州を支點とする一大環狀の分布から當然導かれるものであることは、容易に首肯されるであらう。中國四國に於けるこの環狀の系統線は、時に山口縣下と南豫、土佐の同似、或は山口縣下と南豫との相通、更には出雲と土佐との對應牽引等の種々相となつても現はれてゐるのである。四國との關係に於いても觀られるかゝる山陰・防長の特性は、この山陰・防長の地帶と、廣島縣地方とを愈々質的に區別せしめるであらう。

轉じて廣島縣下、ことに藝州の方言を岡山縣下の方言狀態に比較する時、等しく山陽道の方言ではあつても兩者の間にかなりの質的相違のあることが認められる。これには、岡山縣下が、中國地方の方言とは甚だしく隔絶してゐる所の近畿地方に直面して、自然それとの交渉も頻繁で有り易い地位に

在ることが、先づ考へられるのであつて、恐らくはかゝる關係によつて、岡山縣下の方言は、藝州などの方言とは手を分たしめられる樣になつたものかと解せられる。(1) さうして先にも述べた、備後が岡山縣下の備中に通ずると言ふ事は、かゝる意味に於いて、備後方言を藝州方言に對して對蹠的に考へしめ易い。

1、近畿地方と中國との關係と言ふ點では、山陰地方に就いても考へなければならない諸種の問題が多いが、それは今直接必要でもないので觸れない事にする。

[後註] 內海島嶼に關しても、山陽各國の方言の相關々係について前述したまゝのことがやはりその國々の島の間に、大體に於いてよく當てはまる。

以上の如くであるならば、こゝに中國地方に於いては、略々藝州地區が、假令何縣下であるにもせよ、或る種の特殊的地位に立つてゐることを歸結し得るであらう。即ち安藝の國は、中國地方に於いて、種々の著しい特異性を有する地域を先づ控除して然る後殘される態の消極的に限界づけられる一方言領域なのであつた。消極的とは便宜的な謂ひに過ぎないとも言へる。藝州がこの樣に特立されることは、藝州獨自の必然性と言つてもよいものなのである。今假りに中國方言の代表を求めるとすれば、かゝる地位にある藝州地區方言を擧げることが、或は最も妥當なことかも知れない。尠くともかうして藝州方言が把握されると言ふことは、意義の深い事實である。これが、中國地方らしい中國方言の代表であると言ふことは許されてよいであらう。所がこれの屬する縣は今日廣島縣である。故に我々は廣島縣の方言として正に合理的にまづこの安藝方言を採り上げる事が出來るのである。

三

廣島縣地方の方言はかうして特質的に安位せられるが然し今言ふ藝州一國も、これを完全な一定の方言領域として蝕呑みにし得るものでは更にない。大體はこの一領域をかなり明瞭な一方言區域と認め得るのではあるが、しかし依然內部事情として他地方との聯關を考へなければならない點も少くはないのである。廣島灣岸地方やその島々には、西の周防に共通する言語現象が覗はれる。備後方言の色彩は、藝州東南部地方でも亦觀られる點がある。石見の邑智郡の奥部など、藝州奥と通ずる點もある。藝州の西部と周防の東部とにも亦歩みよつた點が觀られる。從つて一義的に安藝一國を獨自の方言領域とは認め難いのである。然しこれは理の當然である。凡そ方言の分布はその分布の系統の上から正視せられなければならない。さてその時、この系統の線に隨つて分布の成立を動的に觀ようとするものには、所謂方言周圍論がある。さ

うしてかゝる方言分布の結果乃至は一段階を、靜的に平面的に眺めようとすれば、こゝに所謂方言區劃なるものが設定せられる。逆に言へば方言區劃は方言分布の一定の共時面上に便宜的に措定される。それは同時に系統的に立体的に解釋され、四周との聯關がつけられなくてはならない。その系統を發生論的に再構成してかゝるものが周圏論である。從つてこゝに區劃觀と周圏論的觀點とを並置した際には、この兩者は對立するものでは決してあり得ない。卽ち兩者は方言分布を系統論的に觀ると言ふことの二面にしか過ぎないのである。要するに有るものは方言分布であり、それは分布の系統のあらはれに外ならない。故にかりに區劃を施さうとしてもそこに明確な一線が常に引かれる筈のものではない。もとよりさう言ふ場合もあるにはあるが、然しその多くは、地理的或は歷史的必然の特別な事情によつて生じたものが必ずしもさうと俄かに斷定できない樣な場合でも大抵は國語方言の分布上より觀る時は全く部分的な現象でしかない場合が、大部分なのである。この部分的な特別な現象でしかない點は注意を要する。もと〳〵區劃を成立せしめる條件は、色々のものが相より相まつて存するのが普通である。從つてもし方言區劃がありとしても、それは等語線の束によつて大まかに限界づけられるのが當然なのである。區劃とはさう言ふものと觀るの外はない。故に我々が方言區劃とよぶ時には、かう言ふ性質の區劃を以て方言區劃とよんでよいと思ふ。常に明確な一線に圍まれた樣なものを以て方言區劃と見なし、さう言ふ意味に於いて方言區劃なるものを考へようとすることは、既に區劃論のための區劃論になつてをり、これは少くとも區劃の要請にもとつてゐる。さてかゝる自然なある範圍としての區劃は、字義通りには區劃の名に適はしくなく、隨つて嚴密には分布の名をより妥當とするのである。これによつては限界はどうあらうとも、兎も角、各種の言語現象について見た時にそこに綜合的に納得させられる或る方言領域——それが實は方言區劃とよばれるものなのだが——の姿と言ふものがよく言ひ表はされる。その限界のおぼろな所、言ひかへれば分布の背後には直ちに分布の系統が豫想されてゐるのである。この考慮に立つて或る分布區域を方言區劃とよぶことは許されてよい。從つて、この意味に於いては安藝方言を一方言區劃として受取ることに謬りはないのである。

四

以上を序說の一端ともして次下、當地方の方言の實體を精しく考へるべきなのであるが、今はたゞその大體の特徵の而も一斑を記すのに止める。さうしてこれはもと、廣島縣地方の方言について述べることを課せられたものであるから、今

は必ずしも安藝に限ることなく、藝備に亘つて、これらの特質の一端を大觀したいと思ふのである。さうすることは、元來安藝と備後との間に觀られる對立の狀態が終始不變の絕對的事實では決してなく殊に語法上など安藝・備後はもとより更に廣い範圍に亘つても相通ふ現象が見られるのであるから、當に理の然らしめる所でもある。もとより當地方に限つた特質と言ふものを擧げることは容易でなく、恐らくそれは俄には不可能なことであらう。地方の言語現象を國語方言の分布として受取ることが第一に大切であるとすれば、凡そ當地方にだけ存すると言ふ樣な說明は、おろそかにはなし得ないからである。從つてこゝに點描するのは、他地方は兎もあれ少くとも當地方としてはかう言ふのが大きな特徵だと言ふばかりの意味なのである。

音韻上、音節としては、單純なエ〔e〕をもたないでア行のをも〔je〕と發音する向きが藝備共に諸所にあるのではないかと思ふ。これに關聯してオ〔o〕を〔wo〕と發音することもある樣である。

鼻母音の轉訛した形跡を示すものかと考へられる背戸（センド）、籠（カンゴ）等の發音もどこかで聽き得る可能性はある樣に觀てゐる。廣島縣下ではないがそれと軌を一にする方言の島、例へば大三島などには、この類が相當多く見出されるからである。單純な名詞の場合以外なら、村岡淺夫氏の功になる「廣島縣方言の研究」（廣島縣師範學校鄕土研究室編）にも左の注意すべき記述があつた。

今一つ、石見邊境で著しいのは、すべて下に、濁音が來る時には上の音節とその濁音との間に鼻音「ン」が挿入することである。例へば木或は竹で突くと言ふのを木ンデツク、竹ンデツクと言ひ、「それでも斯うだから」と言ふのをソレンデモ、コオンダケーの如くなる。特に前述の樣に指定の助動詞だ（又はじや）の上に來る際に著しい（一八二頁）「要らないのだ」と言ふ所で「イランノンヂャ」などと言ふのは、廣島市などの幼い子供からも聽き得る所である。尾道市あたりで、「あの人が」「この人が」の意として「アンナンガ」「コンナンガ」（共に卑稱）と言ふのにも亦、鼻母音の證跡を認め得るかと思ふ。

所謂相通では〔s〕→〔h〕が著しく耳につく。藝備を通じてさうである。「ありませう」は「アリマヒョー」「下さい」（つかんせ）は「ツカンヘー」「おしまひなさいませ」（おしまひなさんせ）は「オシマイナハンヘー」の如くである。單語にと言ふよりも語法上に著しいのが、特に注意される。

連母音の同化も當地方にとつて特徵ある現象である。〔ai〕〔ei〕は備後に於いては、備中などに關聯して〔ai〕>〔ei〕又

は更に〔ui〕>〔e:〕と訛る所が多く、而も南に寄るほどこれが著しいが（所によつて〔ui〕>〔a:〕となる所もあつて、かなり複雜な點もある）、藝州では〔ui〕>〔a:〕となるのが大部分であり、これは尙西域にもつゞいて見える。（備後に西隣する安藝豐田郡、更に少しならその西側の加茂郡には、〔ai〕>〔a:〕も認められる）備後では更に〔oi〕>〔e:〕（面白い、オモシレー）〔ui〕>〔i:〕（寒い、サミー）の變化が〔ai〕の相互同化に關聯して行はれてをり、これ又多少は西に續く藝州方面にも見えてゐる。

2　國語方音に於ける〔ai〕連母音の諸相（國文學攷三ノ二）拙稿

アクセントに於いては、藝備を通じて、「ｏｏｏ」又は「ｏｏｏｏ」の型式及びそれらの類似型式（又多音節語に於けるこれらの發展型式）が、最も大きな特徴と觀られる。文アクセントの形式を觀ても、亦かゝる語アクセントの型式を擴大した底のものがその特徴をなしてゐる。さうして「知りません、シリマセン」「江田島村、エタジマムラ」などに聽いても分る樣に、初め幾音節かの低音部も「山」を普通に「ヤマ」と發音する時の「ヤ」ほど低くは無く、稍々上つた調子であり、且つ「シリマセン」などであると最初の「シ」は多少引いて長めに發音され、次いで「リマ」は一層早口に過ごされる等のこともあつて、當地方アクセントの全體としては大體東京語と同傾向のアクセント體系を有しながらも、かなりそれとは異つた調子のものが強い特徴として聽かれるのである。「ｏｏｏｏ」「ｏｏｏｏｏ」型式を中心とする當地方の語アクセント・文アクセントの特徴は南九州乃至西北九州に於いても、これとよく質的に相通ずるもののあるのを聽き得るのであるが、轉じて山陰の鳥取縣下などでも明かに亦さうである。四國の西南部、卽ち南豫と土佐幡多郡とより成る一劃に觀得るアクセントの一面の主調も亦、これによく通ふものである。かう言ふ狀態は中國地方のアクセントを考へる上の有力な關鍵であることは多言を要しない。中國へと四國へとに延びた系統線の一環は、このアクセントの上に於いても捕捉せられるのである。分布系統を考へる上に、或は地方の言語現象を觀る上に、言語の部門をどれかに限つて抽出してのみ觀ることは甚だしく妥當を缺くものである。アクセントに就いてかう觀られると言ふこと、或は音韻變化の事象の上でかう觀られると言ふことは必ずやその上に於いてのみあり得る事態ではなく、他の語法その他の部門に關しても略々同趣のことが觀られるものであらう。尠くとも觀察に當つてこれらの部門を徒に引離して眺めることは不當と言はなければならないのである。言語現象は畢竟全一でしかないからであ

る。

五

次は語法に就いてゞあるが、安藝の人稱代名詞對稱に「コンナ」があり、助詞「は」を伴つて「コンナー」となる。これは親密な男子間のぞんざいな言ひ方として頻りに用ゐられてをり、男學生の言葉としてもよく通用されてゐる。格助詞「ガ」を伴ふ時は「コンナガ」であるが、それが備後では「コンナンガ」となることは先に述べた。第三人稱として安藝に「コンニ」「アンニ」があるが、これは男女間何れにも用ゐられてゐる。くだけた氣持の言葉遣に相違ないが、「コンニ」は相手を目の前に置いて、これを第三者風に言ひなし、或は第二者に語る用のものゝ樣である。一面殆ど對稱に近くも使ふ。「コンニ」「アンニ」の形は我々の興味を誘ふ語法の一つである。「コン」「アン」は恐らく「これ」「あれ」であらうが、さうすると「コンニ」「アンニ」は元來「これに」「あれに」であつたことになる。それは意味のあることであつた。今、大三島肥海の方言廣島縣地方と同系の言語によると、こゝでは人の姓の下に「ニ」をつけて「山田ニ」などとよべば上等の敬語法となる。それに類して「コチラニ!!」と言ふのも「お宅の旦那さん!!」と言ふほどの意をもつてゐる。「コレニ!!」と言ふのはやゝ品位は下るが依然丁寧ぶつた言ひ方たるを失はない。「このお宅の人よと」言ふほどの氣持である。今これに比考すれば「コンニ」(これに)なども、もとは右と同じくよびかけのことばであつたかもしれない。さうして尠くともこの「に」助詞は右の樣な尊敬の意味を多少とも具して添加されたものではあるまいかと思はれるのである。關西地方で今日右の「山田ニ!!」などと言つた稱呼は殆ど聽かれないのに、當地方に「コンニ」・「アンニ」の形があつて「ニ」は分離せず、「コンニガ何々」「アンニノ……」などと用ゐられてゐるのは面白い事實である。それかあらぬか、かつて私の下宿近くの多分廣島兒と思はれる一中老婦人が「トナリニ!!」と大聲で呼んでは、よく風呂の案内をしてゐたのをきいてゐるのも併せてこゝに附記したい。それにしても「コンニ」・「アンニ」は備後ではあまり言はない樣なのである。

體言に接するてにをはの複合は、藝備を通じての著しい現象である。(その外周の地方にも一般に此は多い。)格助詞「を」が添へば

草〔kusa〕を　クサー

鳥〔tori〕を　トリュー(備後の南部には「トリー」もある)

臼〔usu〕を　ウス(ー)

酒〔sake〕を　サキョー
人〔çito〕を　ヒトー
の如くになる
次に「は」が添へば
花〔hana〕は　ハナー（この場合は「は」を發音することが多い）が
槌〔tsutʃi〕は　ツチャー
留守〔rusu〕は　ルサー
腫れ〔hare〕は　ハリャー
音〔oto〕は　オター
の如くになり「へ」が添へば
こちら〔kottʃi〕へ　コッチー
呉〔kure〕へ　クレー
の様になる。かうした語法上の縮約形態は各種の方面に廣く盛に認められる。「……てをる」が「チョル」となるのもそれであり、「……してちゃつた」の轉の「チャツタ」も同様である。「言ふチャツタ」・「來チャツタ」などの方は廣く全縣によく行はれてゐる。「寢チョル」・「ネチョー」・「ネーチョル」などの「…チョル」ことばは出雲隱岐にもあり、四國にも南豫から土佐にかけて多く、九州にも廣く之が見出されるが、中國では九州につゞいて山口縣下に盛であり、廣島縣下では寧ろそのつゞきとして藝州南部及びその屬島方面によく行はれてゐると言ふ狀態である。

成果は右のとは別趣であるが、依然縮約形態たるに外ならないものに、「御座います」の「ガンス」などもある。當地方としては一つの代表的なことばであり、大體全縣下に行はれてゐる。その內藝州南部には「ガンス」以前の「ゴアンス」などもあり、又藝州では「ガンス」の更に省略された「ガン」もよく行はれ、備後の南部は稍々特別で「左樣で御座います」に當るのを「……ギャンス」と訛るのもあれば、「ゴザイス」・「ガース」もあり、「ゴジャンス」及び一層丁寧な「ゴザリャンス」もある。變つたのでは「ソージャンス」・「ソーザンス」も見えてゐる。「ガンス」系のことばは藝州の西へつゞいて周防にもよく見えるが、こゝでも「ゴワンス」・「ゴザイス」・「ゴイス」・「ゴンス」なども混じてゐる。備中中部以北及作州西部でも點々「ガンス」系の言葉が見え（「ガイス・ガース・ゲース」も混在し）てゐるのも藝備との聯關が考へられる所として注意される。殊に備中北部は備後北部と常に併せ注意しなければならない所柄なのであるが、それがこゝによく現はれてゐるわけである。ともあれ以上がガンスことばの地として、中國では特徴ある一團をなしてゐるのである。

縮約でなくて省略であるが、所謂助詞の抜けも、當地方の特徴として、こゝに挿記しておかなければならない。

「言ふチャツタ」や「ガンス」ことばは、當地方としては常用の敬語法に屬するものである。所がこれらの頻用と相共に明かに意識的に敬語法として用ゐられるものに「……なさる」系の言ひ方がある。それは多く「見なさる、ミンサル」の様に「ンサル」として用ひられてをり全縣下に見えてゐる。

岡山縣下では一層旺んにこれが用ゐられ、作州奥からは因幡但馬に續いてこれが見え、西の石見にも亦これが多い。

島嶼には「見ンヤル」も二三箇所見えてゐる。「見ナハル」も沿岸地方にはある様である。

命令形は「見ンサイ」・「見ンヤイ」の如くである。因みに出雲隱岐に多い「見サッシャル」(「ミハッシャル」も)などの敬語法は備後にもあるが、安藝などでは中老以上の男子に時折聞き得る程度にしかなく、而も往々、人の動作を輕視してこれを揶揄する様な氣持の下にこれが用ゐられ勝ちなのである。

「笑はれる」・「來られる」の様に「れる」・「られる」を用ゐてする敬意表現は、又「ミンサル」の類と相並んで本縣下に廣く常用せられてゐる所である。岡山縣下にもこれが又極めて盛に用ゐられてゐるが、本縣下では敬意の表現價値が岡山縣に於けるよりも一段と低落せしめられてゐることが感ぜられる。その使用狀態を比較勘考するのに、どちらかと言へば岡山縣の方がこれを敬語法らしく常用してゐる様なのである。本縣地方に於いては、それだけ「れる」・「られる」を用ゐての敬意表現の意識が薄れたり、又必ずしも正常でなくなつたりしてゐる様に解せられるのである。當地方で人に語る時、自己の尊族についても、平氣でこれを使用するのもその一つの現はれと觀られる。

「見ンサル」・「來られる」等の反對側に立つ卑罵の表現法としては「見ヤーガル」・「キャーガル」が、本縣として特徴的であらう。さうしてこれらも亦拗長音「ミャーガル」・「キャーガル」・「キャーガレ」となることが多いのである。(命令法は「ミャーガレ」・「キャーガレ」。)

今一項、所謂感投助詞の「ノー」が全縣下に旺んであることもこゝに特記しなければならない。強い氣衝で以て、開口の下に奥から「ノー」と出す物言ひは、忽ちにして當地方人士たることを氣附かしめるものである。それでゐてこの「ノー」は當地方としては必ずしも卑しい物言ひではない。目上の人に向つても「ノー」はよく使はれるのである。尤もその際は語法上他に尊敬態の構文のとられることが普通ではある

（例「ホーデガンスノー」（さうで御座いますね）。一般には「ノー」は敬讓的に觀て普通度の用語であると言つてよいであらう。反面「ネー」や「ナー」は地言葉としては殆んど用ゐられないと言つてもよいほどなのであるから、これを以ても「ノー」の當地方に於ける性質は推量し得るのである。先般の採集であるが、四國の阿波南部方面には、感投助詞に「ナオ」と言ふのがあつた。年長の人が主として使つてゐる樣であつたが、これは明かに尊敬した氣持から發せられてゐたのである。宍喰町小學校の先生に尋ねても「これは特別丁寧なんだ。大分目上の人でないと使はない」とのことであつた。尙その先生の敎示せられた所によれば、海部川の上手の方では「ナオ」とも言ふが又「ナモ」と言ひ「ナオシ」とも言ふとのことである。かくてこゝに、「ナモシ」▽「ナモ」「ナオ」或は又「ナモシ」▽「ナオシ」▽「ナオ」の過程が一區域の方言上に於いて明かにされたのであつたが、以て「ノー」は愈々「ナオ」の轉と見ることに無理はないことが知られるのである。さすれば「ナオ」より出た「ノー」にかなりな敬意をもつた用法も存することは不思議ではなく、たゞ「ノー」となり切つては、その獨自の音感からも、又慣用の度の高まるのにつれて、遂にはその表現法上の品位の下落を來すに至つたことは、「れる」・「られる」の運命にも觀得る如く、又自然の勢だつたのである。

末尾にいさゝか所を得ないが、音便上の一特異例を附け加へておかう。「讀みて」・「飛びて」は通常撥音便になる所を本縣の沿岸部及び島部では、「ヨーデ」・「トーデ」となつてゐる。中國四國では外に山口全縣下、それに連る石見南方の一部、四國の土佐一圓に盛であるが、近來は學校敎育の普及につれ、この種の音便は次第に減退しつゝある樣であり、隨つてどちらかと云へばこれはやゝ下鄙た發音であるとの感じが漸次普及しつゝあるかと見られるのである。

六

次に單語については、語彙の分布上注目すべきものゝ二三をただ附載する程度に止めておく。

「蛇」を「クチナオ」（「グチナオ」も）と呼ぶのは、廣島縣を中心に、東は備中、西は石見國東半に及ぶ範圍の樣である。中四國では、これと四國の南部に見えてゐるばかりの樣である。

「夕立」を「ソバエ」（「ソバイ」も）などと呼ぶ所を求めると、中國四國では、伊豫・讃岐に、播磨・岡山縣・廣島縣・山口縣の四者の各沿岸部に、それから內海島嶼にこれが見出されるのである。

廣島縣の海岸部はかく（又前揭の特殊音便の場合、又「見

なさる」を「見ナハル」と言ふ場合）特別の地帶とも觀られる點があるのであるが、例へば「山の頂上」を「テンゲツ」・「テンケツ」（「トンゲツ」・「トンケツ」も）などゝ言ふ所になると、安藝本土の南部から安藝の島・伊豫の島を經て、伊豫本土北部の高縄半島にかけての範圍が一團をなしてゐると言ふ樣なこともあるのである。

さうかと思ふと備後本土から備後の島、伊豫の島を經て伊豫本土北部に亘る間に共通性の現はれることも尠くないのである。例へば「燕」を「ツバナ」と言ふのは、中部以南の備後（それに隣る藝州東部の豐田郡も）から島をへて伊豫本土北部に亘る地方及び讃岐である。「落雷する」のを「アマル」と言ふのは四國全體・岡山縣・播磨・出雲に多いが、その岡山縣のと四國のとを結ぶ地帶として、南部備後からやはり島々を經て伊豫に亘る分布が明かに看取されるのである。

かゝる藝備の南部地方と同樣、西・北・東の邊境地帶に於いても亦、夫々隣國地方との複雜な交渉面が見られることは先にも一部宛指摘しておいた所である。

七

扨て當地方の方言を安藝と言はず備後と言はず大觀する時、之を通時的に眺めれば、例へば格助詞の體言への複合に見る如く、また「チョル」言葉や「ノー」助詞の行はれ方、又單語に於ける連母音の種々の同化に觀る如く、正に近古の國語變動期の跡或はそれに近い性質のものをよく今に傳へる所があるものと言ふことが出來よう。連母音〔eu〕が〔jo:〕となつたのも〔ai〕・〔oi〕・〔ui〕などが同化を起したのも相距る性質のものではなく「である」が「ぢゃ」になつたのも「ておる」が「チョル」になつたのも相距る筋合のものではないと思はれるからである。さうして「ナオ」〔nao〕が「ノー」となつたのも「鳥を」〔tio〕が「トリュー」〔tiu:〕となつたのも、要は連母音の同化に外ならないからである。故に、近古語の寶庫は先づ九州地方に求めなければならず、中國に於いても山陰地方等がそれに對へる有力な地帶ではあるにしても、尙この藝備も亦、近古語を今にみる活舞臺として定位され得るのである。ことに山地と島嶼とはかの一例、鼻母音の轉訛形殘存にも見る如く、特にその有力な地點とすることが出來るのである。

八

言語教育の基礎は史的反省を究めた後に正當に打立てられよう。今日の我々に與へられた大切な課題の一つはこれでなくてはならない。所で、反省をつくさない今、能く藝備の言語教育を語ることは果し得る所でないが、然し與へられた今日の共時面の精確な把握がすべての出發點であることは不動

である。而もその共時態は方言の面であるから、一層よく共時的把握が通時的把握たり得るものである。こゝに私が左に數言を費し得る餘地もあるであらう。

一例を「ガンス」（御座います）に關するものにとる。「ガンス」の盛なことは先に述べた。扨て當地方では「お早う御座います」などと言ふ挨拶語に「オハヨアリマス」と言ふ。「御無事で結構です」は「オマメナラヨロシューアリマス」「有難う御座いました」は「アリガトアリマシタ」である。廣島縣下の外にも、山口縣及び石見東部（それに關聯して出雲地方の一部にも）に、かういふ言ひ方が存してゐる。備後の南では「オハヨーアリャンス」と言ふ形も行はれてゐる。所で、かゝる語法を今日「ゴザイマス」に改めて然るべきことは標準語法に照らして明かなことであらう。それは尤もなのであるが、然しこゝに考察を要する點がある。それはこの「オハヨーアリマス」を成立せしめた心意である。「アツーガンス」・「サムーガンス」などを常用する所は、言はゞ皆もと〳〵「御座います」ことばを使つてゐるのであつた。それと同樣に「オハヨーガンス」でよかつたのである。所が「ガンス」が「ガン」とも省略されたりして甚だしい轉訛形となり、その素姓も何も意識されなくなると、そこには、丁寧な心、敬讓の心を主とした挨拶語の當然な要請から自ら彫琢と改變が必要だつたのである。かくして「ガンス」は「アリマス」にわざ〳〵改められたのに相違ない。その敬意表現の技巧上の心意又は苦心は必ずや善意に解釋されなければならないのである。今やその「……アリマス」を元の「ガンス」ならざる「御座います」に歸さうと言ふ。隨つてこれには、抑々「……アリマス」の表現が中核まで惡くて之を改めるのではなくたゞ「……アリマス」表現の氣持をよりよく（社會的に）生かす爲に、世上への通用性の一層廣い發表手段を求めて、一に表現の形式を轉移完成させて行くのだ、と言ふ心構が基本になるのでなくてはならない。

「のー」を「なー」「ねー」などに移すのにしても、「のー」に對して外來者が感ずる樣な感情を基調にして、これが所謂矯正に臨むならば、その功は報いられないであらう。これも亦、「のー」にこもるものとその外延性とを全部さながらにうけとりつゝ、他方國内での言葉の流通性を目指し乍ら、偏に地方言語の練磨彫琢を期すると言ふ態度を以てするのでなかつたならば、何れ宜しきは得ないのである。

これに比し、「見ンサル」の「ンサル」の還元や「讀ーデ」「飛ーデ」の訂正などは、主として外形上のことであるから、比較的容易にその實績を擧げ得て、言葉の品位を向上させることが出來よう。然し、立派な敬語のつもりでゐる「チャ

ツタ」が、形は同じの東京語の「チャツタ」であると極く無雑作な語法とされてゐるのなどは、言語教育上の難題たるを免れないのである。若しかの「うちのお父さんがどう〳〵せられた」などの語法に至つては、これが自尊の話法であるだけに、一般的な教養からも、その人々にやがては、比較的よく自省され易いものかと考へられる。

「のー」を「なー」「ねー」に移すとすれば、發音上の訓練が必要なことは明かである。これは一例であるが、發音上からの訓練は、「赤い」を「アキャー」とか「アカー」とか言ふのへはもとより、更に前述の連母音の同化を含む語法上の縮約形態の標準語法化の上にも、要するに言語教育上の一切の處置の上に加へられるべく、すべて言語教育は各方面より相助成的に行はれなければならないのである。（單なる音聲教育の孤立的に行はれるべくもないことはもとよりであり、況んや單なるアクセント教育をやである。）たゞ本稿に於いては、當地方の語詞構成上の特質等を指摘する余裕が無かつたので、それらとも關聯させて當地方言語教育の方法を委細に述べることは、これを他日に讓るの外はない。

（昭和十四年四月二十九日）